

石井晴美（著）

作業療法が生きる地域リハビリテーションのすすめ

—いのち輝く生活の支援を目指して

浅 海 奈津美
（作業療法士）



丸ごと作業療法

作業療法士による作業療法士のための作業療法の本である。それも、ちまたにある指南書とは違い、著者がしてきた/している等身大の作業療法を、この1冊に込めて、「あなたもぜひ!」と、仲間に差し出してくれたものだ。核心は「作業」。でもそれだけじゃあない。

著者は2010年に64歳で、現在の氏の地元でもある東京郊外に民家を借り、小規模通所介護事業所を立ち上げた。さかのぼること30余年、デイサービスなんて言葉さえない、モデルなき時代に、今でいえば通所リハの作業療法を、氏はゼロから創出した（嘘ではない、私はそこにいた）。その後、子育て、家庭の事情による退職とブランク、親の介護といったライフコースを経ながら、非常勤で仕事を再開。訪問リハや機能訓練事業を通して地域に根を下ろし、その延長線上に今の活動を実現させた。そんなこんながつづられた本書の前半は、喜びに満ちた地域作

業療法実践の記録であると同時に、1人の女性作業療法士人生のナラティブとも読める。何とか理論も、カタカナ概念も、マジックのような〇×療法も登場しない。あるのは、作業療法士が作業を使わないでどうする、作業を上手に使える人はこんなに生き生きとなるのに、という経験に裏打ちされた確信であり、その作業療法哲学を時々の状況に即して具現化していく、紆余曲折も含めたプロセスや工夫や学びや事例である。ぶれないとはこういうことを言うのね。

後半は、現在デイサービスで“している”ことの紹介。地域（とりわけ高齢者に向けた）作業療法実践の手がかりがほしい人は迷わずに読むこと。施設環境の工夫、通所者の評価とプログラム内容、事例、運営のノウハウやお金の話、地域連携の仕方等、デイ実践に入り用なあらゆる側面について、自身の信念や構想と現実をすり合わせた結果、何をどう展開することになったのかが、限界も含めて示

される。視床痛から競馬観戦まで、足浴から終末期まで。写真とともに作業療法の奥義が随所にさりりと書いてある。うっかり見逃さないように。

とりわけ頁が割かれているのが、オリジナル評価ツール「お楽しみ測定」とその活かし方。中身は読んでのお楽しみであるが、利用者の状態や変化が、本人のみならず家族や他職種にも一目瞭然で、使い勝手がよさそうだ。作成過程のエピソードも楽しいし、測定に臨む高齢者の衰えが如実な場合にどうするかについての著者の考えもきちんと述べられている。

今これを読んでいるあなたの立場や状況は、著者のそれとはきっと違うだろうけれど、この本を読んで、作業に抱って立つ作業療法のちからに自信をもって、さあ地域へ向かおう!

〔四六判 236頁 2,400円+税〕
シービーアール 刊
☎ 03-5840-7561